

風景とともに流る

— 蕪生野の風土と営みが混ざり合う学び舎 —

営みの痕跡
曲線屋根

自然環境
山

流れ
コミュニティ

本多航大
担当教員 梅原佑司

1.対象敷地背景

1-1.歴史

高知県香美市香北町は、豊かな水資源と山塊に囲まれた地域である。中でも山側に位置する対象敷地・蕪生野（にろうの）地区は、山間部からの清澄な水と傾斜地を利用した棚田を有し、古くから稲作を中心とした農業生産地として発展してきた。



図1 敷地図

1-2.現状課題

人口減少とコミュニティの希薄化

香美市全体で進行する人口減少に伴い、敷地周辺でも空き家や耕作放棄地が増加傾向にある。これは単なる物理的な荒廃にとどまらず、かつて地域に根付いていた共同体としての原風景の喪失をも意味している。

森林環境の荒廃

戦後の拡大造林による杉の密植は、急峻な地勢が管理の障壁となり、日照不足に伴う林床の荒廃と樹木の生育不良を招き、保水力低下が深刻化している。土砂災害のリスク増大が喫緊の課題となっている。

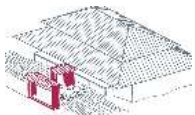
2.目的

この地域が抱える課題は、土地の管理を行うだけでは解決せず、人の不在による荒廃は不可避である。自然との関係の中で生まれる豊かさに人があらためて目を向けることで、徐々に土地は再生していくはずである。人がこの場所に関わり続けるために学びの場が必要である。

3.設計手法

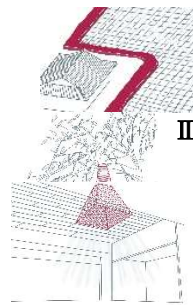
集落に残る営みの痕跡を読み解き、その形状や意味を再解釈し、自然や他者との関係性をつなぎなおすツールとして用いる。

3-1 営みの痕跡の分析



I 武家屋敷の門構え

二重門の形式を、空間の結界および来訪者を迎え入れる導入部として再解釈する。



II あぜ

田を囲んでいる畔。田んぼ作業の途中、ここは一休みの場と変化する。

III 水路と植物

樹林帯を貫く水路と動線を並走させ、水と植生の関係性を身体的に知覚させる。

IV 明り取り

既存民家に残る明り取り。民家の中で異質さを感じさせつつ、引き寄せられる求心性がある。

V 石垣

集落の基盤を構成する石垣。先人たちの手作業の痕跡として残り、山から集落をグラデーショナルにつなぐ。

VI 墓

山の中に残されている無縁墓。過去や未来に思いをはせる場でもある。

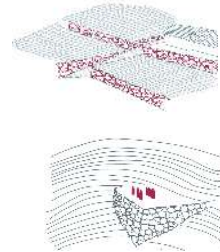


図2 営みの痕跡

4.設計内容



流線形の計画

この土地には多様な要素が散らばりながら、まちから山へ向かって水路沿いに集落が伸びる。それらの要素・機能のつながりを建築によって可視化しながら、周辺環境を取り込む有機的な屋根がかかる。集落の営みの痕跡をもとに、マルシェ、食堂、育苗場、窯場、木工場、休憩所が連続し、自然環境とともに行われる営みの豊かさをこの空間で学ぶ。

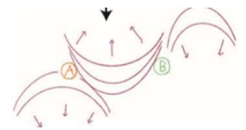


図3 配置図

I 集落の玄関マルシエ



図4 マルシエ

市街地と集落を接続する結節点として、武家屋敷の軸線を引き継ぐ形で配置する。樹木、曲線屋根、壁面を多層的に構成し、外部から内部へのシーケンスをグラデーショナルに演出することで来訪者を誘引する。

II あぜ縁食堂



図5 食堂

農作業と食の行為を接続するため、畔の形状に沿ってリニアに展開する食堂を計画する。既存納屋の縁側空間を拡張し、棚田との視覚的連続性を確保する。収穫期にはファサード沿いで「はざかけ」を行うことで、稲作風景と建築が一体化し、季節による景観の変化を生み出す。

III 育苗場



図6 育苗場

ビオトープ内を緩やかに流れる小川のような屋根形状とし、その懐に広がる空間で育苗活動を行う。水辺の環境と建築を融合させ、ある程度の苗木になるまでこの生態系の中で育成した後、背後の山へ植樹するサイクルを構築する。

IV 窯場



図7 窯場

山林と集落の境界点に配置する。間伐材を炭化させ、肥

料として農地へ還元するほか、隣接する浴場や厨房の燃料として利用する。排熱を浴場の補助熱源として利用するなど、循環を可視化する施設とする。

V 手作業の木工場

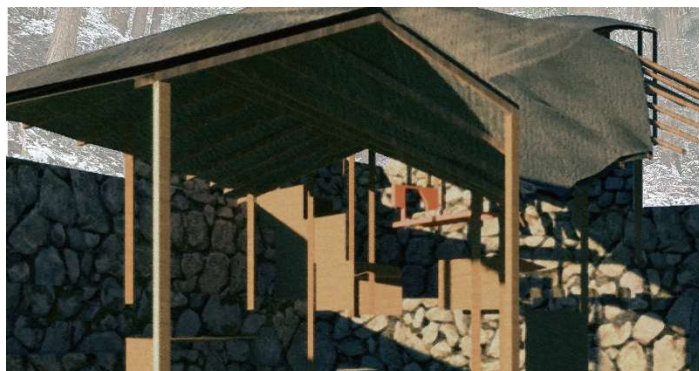


図8 木工場

この造成によって生まれた空間に木工場を配置する。レベル差を利用してワークスペース、加工場、製材場をゾーニングし、山林での伐採から加工に至るプロセスを断面構成によって表現する。

VI 休憩所



図9 休憩所

斜面に対して、間伐材と落ち葉を用いてマウントを作り、その上に設置する。間伐によって生まれた竹、を骨組みに、杉皮を屋根材に用いる。利用後は撤去され、その場所に植樹を行う。無縁墓の背後にそのプロトタイプを設置することで、過去、未来に思いをはせる休息の場になる。

5.まとめ

魅力的な資源や風景が進行形で消えている現代の社会において、制度のみでそれらを維持するのはほぼ不可能であるように感じる。やはり、人がその場所の豊かさに気づき、残していこうとする意識を誘発させなければならない。建築がはっきりした形を持ちながら、周辺環境となじんでいくことで場所のポテンシャルを最大限発揮させ、次世代へ風景を継承する真の原動力になると考える。

6.参考文献

香北町史,香北町教育委員会,1968

国土地理院 地理院地図 <https://maps.gsi.go.jp>

* 1 高知工科大学

システム工学群 建築・デザイン専攻